

Title	文化とアイデンティティの政治学序説
Author(s)	時安, 邦治
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3155092">https://doi.org/10.11501/3155092</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ときやすくに はる 時 安 邦 治
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 14339 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	文化とアイデンティティの政治学 序説
論文審査委員	(主査) 教授 三島 憲一  (副査) 教授 奥 雅博 教授 木前 利秋

### 論文内容の要旨

本稿は、現代社会のさまざまな方面で生じてきているアイデンティティの政治を理論的に扱おうとする社会思想的な研究である。

本稿の理論的背景となるのはアンソニー・ギデンズの本質論である。ギデンズによれば、モダニティの生活環境に生じた、マクロ・ミクロ両方にわたるさまざまな変容によって、我々の社会は「ポスト伝統的社会」へと移行し、生活スタイルの柔軟な組織化が可能となってきた。今や、生活スタイルは我々の自己アイデンティティを支える最も重要な要素の一つとなり、自己はさまざまなオプションの中から反省的に選び取られ、形作られねばならないプロジェクトとなっている。

その中で、ギデンズの言う「生の政治」が生じてくる。それは生活スタイルの政治であり、生活スタイルの決定を「再道徳化する」ことを意味している。モダニティにおいては、個人の人生にとって重要な意味をもつさまざまな経験が個人の日常生活から隔離され、社会化されてしまっている。我々はもはや日常的に人が生まれたり死んだりするのを見ることはほとんどなくなった。かつて誕生、死、性などの経験は、自然や絶対者といった社会外の存在との関連によって意味を理解され、その意味が倫理と道徳の枠組みを支えていた。しかし、現代ではそのような経験が日常生活から隔離された結果、我々の倫理または道徳はある意味で宙に浮いた形になっている。しかし、我々は宙に浮いた倫理や道徳を再び価値づけて、自らの生活スタイルを選び取る必要がある。自分はいかに生きるか、そして、自分の生き方をどのような倫理または道徳によって意味づけるか。モダニティの社会生活においては、ますますそれらが政治的な争点となってくる。

本稿はそのような生の政治の一環であるアイデンティティの政治に焦点を当て、それを文化との関連において解明しようとする。文化とは、象徴と意味の連合というモジュールをコンポーネントとする構成体、世界解釈のための知識体系である。アイデンティティが文化集団との対話的（弁証法的）関係において成立することを確認するとき、文化的マイノリティはしばしばアイデンティティ喪失というアノミーが課せられた状態を強要されていることがわかる。彼ら・彼女らは自らのアイデンティティや生活スタイルが承認されないために、意味ある他者との対話的關係を築くことができず、自己の内面の意味秩序が否定された状態で別の意味秩序を押しつけられている。そのような「課せられたアノミー」を不正だと考える「真正さの倫理」を受け入れれば、チャールズ・テイラーの「承認の政治」がいかに重要であるかが理解されるであろう。ただし、個人の複合的アイデンティティを見失い、文化的アイデンティティ

を本質主義的に一元化してしまうと、承認の政治は破綻する。承認の政治は民主主義として実現するしかないのであるが、その民主主義は文化とアイデンティティの複数性を前提とする民主主義でなければならないであろう。

### 論文審査の結果の要旨

現代社会はその複雑さと問題点が増すにつれて、文化的アイデンティティやライフスタイルをめぐる議論の重要性も増している。それにともない、セクシュアリティやジェンダーをめぐる議論も、国民国家のパラダイムの崩壊もあいまって、これまで自明であった諸概念が徹底的に問い直されつつある。その点で、現代社会を制度的反省能力の増大のプロセスとして捉えるアンソニー・ギデンズのモダニティ論は、フーコーやハーバーマスのそれとも接続可能なものとして重視されている。

本論文はギデンズのモダニティ論を手がかりにしながら、ともすると国家やエスニシティとの関係で議論されがちなアイデンティティの問題を、ヘーゲル以来の「承認をめぐる闘争」の次元で捉え直し、多元的民主主義の理論を構想したものである。特に重要なものとして、社会理論の再ジェンダー化を手がかりにしつつ、アイデンティティ・ポリティクスの多層化を、本質主義対構築主義の不毛な対立を越えて試みていることがあげられる。国内・国外の理論的發展に周到に目配りしつつ、理論的対立だけでは見逃されがちな日常生活の微妙な変化のうちに、新たな複数のアリーナを視野に納めようとする問題意識の展開はみごとである。

以上、本論文は理論の消化の度合い、新たな方向への踏み出し方、概念の緻密さなどに鑑みて、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値すると判定された。